OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	テキスト構成とテンス・アスペクト
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	Gallia. 2001, 40, p. 11-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9092
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

テキスト構成とテンス・アスペクト

春木　仁孝

０．はじめに

フランス語に限らず、言語の時制の用法を理解するには、当該言語のテンス・アスペクトをシステムとして把握するだけでは、現実のテキストにおいてどうしてある時制が用いられているのかを理解するのは難しい。現実のテキストにおいては、時制は様々な要因によって決まる。複数の登場人物間や、登場人物と作者の間での視点の移動、あるいはそれらの視点と一般的な視点の間、そしてまさに時間軸上での視点の移動というように絶え間なく変化する視点、いわゆるトピックに当たるものについての発話なのか、周辺的な事柄についての発話なのか、前景的な出来事か後景的な出来事か、物語の進行を表わすのか説明を述べているのか（これらは互いに密接に関連し合っているが）、事態の間に因果関係があるかどうか、事態が全体的（グローバル）に捉えられているのか、構成的に捉えられているのか、など挙げていけば切りがない。本稿では、具体的なテキストを取り上げ、時制決定の要因のいくつかを検討していく。

一言付け加えるならば、この種の研究には容量の大きな電子化コーパスは余り有用ではない。なぜなら、各時制の用いられ方を検討する際には、それぞれのテキストの性格を十全に捉えていなければならないからであり、そのためにはそのテキストをじっくり読み込む必要がある。従って、たとえ電子化コーパスで興味深い例を見つけた場合も、その例を解明するためには、その例を含むテキストに戻ってテキスト全体の構成と性格を見極めることから始めなければならない。

１．語りにおける複合過去

初級文法でよく言及される図式的な対応、即ち書き言葉の単純過去は話し言葉の複合過去に当たるというのは正しくない。単純過去と共に複合過去が現われる場合は、継続や経験といった英語の現在完了的な意味を表わしているというのも必ずしも正しくない。一つの試みとして複合過去で小説を書いたカミュの『異邦人』のような場合は別としても、現代小説の中で複合過去に出会うことは希ではない。特に１人称の小説では、複合過去が主体になっている場合もかなり見られるが、そのようなテキストでも単純過去も現われるのが普通である。

ここでは、１人称で書かれた小説 Jean-Philippe Toussaint の『浴室』*La Salle de bain* の中に現われる複合過去を検討してみる。この小説は基本的には単純過去が主体になっているが、時折り複合過去が見られる。先ず、次の２例は「これまで～してきた／したことがない」と訳せる、継続および経験の否定を表わす例であ

るので、ここでは簡単に検討するにとどめる。

1) Le lendemain, je fini par donner de mes nouvelles à Edmondsson. Je quittai l'hôtel et, dans la rue, demandai le chemin de la poste à un homme qui courait (*j'ai toujours pris* plaisir à demander des renseignements à des gens pressés.) (SB., p.63)
2) Ce qui me plaît dans la peinture de Mondrian, c'est son immobilité. Aucun peintre n'*a voisiné* d'aussi près l'immobilité. L'immobilité n'est pas l'absence de mouvement, mais l'absence de toute perspective de mouvement, elle est morte. (SB., p.84)

(1)の例は括弧から分かるように、この部分は主人公の内的独白であり、主人公（＝語り手）の現在を出発点に、「私はこれまでいつも～してきた」という部分が複合過去で書かれているのである。

(2)の例の直前、主人公は一人でダーツの試合をしている。そして、突然、モンドリアンについて考察が始まるのだが、そのパラグラフの最後でダーツの的の模様からモンドリアンのことを考えてしまったことが分かる。いずれにしろ、この部分は話の流れの外にあり、主人公の内的独白であり、非時間的な現在形が基調になっている部分であり、「モンドリアンほど～した画家はこれまでにいなかった」という部分が複合過去になるのは問題ない。

この２例が示すように、継起的出来事の語りから主人公（語り手）の内的世界に移行すると、語りの時点＝現在という図式が適用される。もちろん、いくら主人公の考えや感想を述べていても、語りの流れの中で捉えられている時には、語りのシステムの中での時制が用いられる。

以上のような場合を除けば、典型的に複合過去時制が現われるのは、小説などの冒頭である。

3) Lorsque *j'ai commencé* à passer mes après-midi dans la salle de bain, je ne comptais pas m'y installer; non, je coulais là des heures agréables, (...). Edmondsson,(...), me trouvait plus serein; il m'arrivait de plaisanter, nous riions. Je parlais avec de grands gestes, estimant que (...). (SB. p.11)
4) *J'ai arrêté* de regarder la télévision. *J'ai arrêté* d'un coup, définitivement, plus une émission, pas même le sport. *J'ai arrêté* il y un peu plus de six mois, (...). (...) Je revois très bien le geste que *j'ai accompli* alors, un geste très simple, très souple, mille fois répété, mon bras qui s'allonge et qui appuie sur le bouton, l'image qui implose et disparaît de l'écran. C'était fini, je n'ai plus jamais regardé la télévision. (La Télévision, p.7)

(3)は『浴室』の冒頭であるが、先ず複合過去で始まっている。このテキストの中

で複合過去がまとまって現われるのは３箇所しかない。その一つが冒頭である。同じ作者の、やはり１人称小説である『テレビ』*La Teℓevision*でも同様で、例(4)のように冒頭は複合過去である。しかし、数ページ後には単純過去主体になる。小説というのは、予測や予定を除けば、語り手の視点からは、常に過ぎ去ったことが語られる。１人称小説というのは特に、回想という形でその点が明瞭に現われる。そして、回想は語り手の現在から行なわれるのであり、現在（＝発話時）に視点をおいて過去の事を語る複合過去が、回想の開始にはもっともふさわしいのである。それは、語り手の現在がひいては読者の現在に重なることで物語の世界への導入がスムースに行なわれるからである。そして、一旦回想が始まれば、視点を過去に移すのは容易になり、単純過去で継起的な出来事が語られ始めるのである。これを図示すれば以下のように書けるだろう。つまり、最初の幾つかの複合過去はその後の物語の世界に入るための準備運動のようなものである。従って、複合過去が続いている間は複合過去で述べられている事態は継起的な事態として述べられているのではなく、一つ一つ独立的に述べられているのである。

E1 (p.c.) ←
E2 (p.c.) ← 語り手の現在
E3 (p.c.) ←
→ E4 (p.s.) → E5 (p.s.) → E6 (p.s.) ....

『浴室』では冒頭（例(3)）で主人公が浴室にこもった事が述べられた後、本文２ページ目の最後（例(5)）で、同棲しているエドモンソンが主人公の両親に知らせたという文が複合過去で述べられた後に単純過去に移行する。

(5) Edmondsson *a fini* par avertir mes parents.
Maman m'apporta des gâteaux. Assise sur le bidet, le carton grand ouvert posé entre ses jambes, elle disposait les pâtisseries dans une assiette à soupe. Je la trouvais soucieuse; depuis son arrivée elle évitait mes regards. Elle releva la tête avec une lasse tristesse, voulu dire quelque chose, mais se tut, choisissant un éclair dans laquelle elle croqua. (SB., p.12)

ここで興味深いのは、(5)で複合過去から単純過去に移行するのだが、その前に、一度単純過去が現われる部分があることである。次例は、冒頭の第４パラグラフであり、例(5)の直前のパラグラフである。

(6) Un matin, *j'ai arraché* la corde à la ligne. *J'ai viđe* tous les placards, débarrassé les étagères. Ayant entassé les produits de toilette dans un grand sac-poubelle, *j'ai commencé* à déménager une partie de ma bibliothèque. Lorsque Edmondsson *rentra*, je l'*accueillis* un livre à la main, allongé, les pieds

sur le robinet. (SB., p.12)

これら二つの単純過去までに出てきた複合過去は、すべて＜＋意志性＞という特徴を持った動詞ばかりである。一方、(6)の単純過去は単なる出来事を表わしている。そのあたりに、解決の糸口がありそうである。また、このことは(5)での単純過去への移行が、３人称主語の発話によってなされている点とも関連している。

これ以降、28ページおよび33ページで主人公がなぜか招待状を受け取ったオーストリア大使館でのパーティを想像し、その場面での想像上の大使のスピーチの中で複合過去が用いられるのを除けば、５箇所に複合過去の例が見られる。先ず、41ページの例を見てみよう。

(7) Nous *avons fait* le tour de l'appartement vide. Nous *avons bu* du bordeaux assis sur le parquet. Nous *avons vidé* les caisses, déficelé les cartons. Nous *avons ouvert* les fenêtres pour faire disparaître l'odeur des anciens locataires. Nous étions chez nous ; il faisait froid, nous nous querellions au sujet d'un chandail que nous voulions tous les deux revêtir.

La crémaillère fut pendue. Le couple que nous avion invité arriva très en avance. ... (SB., p.41)

この例では、パラグラフ全体が複合過去基調で書かれ、２行だけ示した次のパラグラフは単純過去基調に戻っている。この直前のパラグラフでは、引っ越して来る前日に、前の住人とそのマンションで知り合う場面が述べられている。従って、例(7)のパラグラフでは、その翌日の場面に変わっているが、冒頭にたとえばle lendemainというような時間軸上での移行を表わすマーカーが見られない。おそらく、その時間的違いを明瞭に示す手段として、ここでは複合過去が用いられているのではないかと考えられる。そのようにすることにより、その前のパラグラフがエピソード的なものであり、再び語りの本筋に戻ってきた事が示されているとも言える。そして、一旦それが分かれば、再び単純過去基調に戻るのである。例(7)の二つ前のパラグラフで、主人公は前の住人が残していった物を見つけ、前の住人のことを考え始める。そして(7)の前のパラグラフは、Les anciens locataires, nous les avions rencontrés la veille de notre installation.というように、大過去でまさにエピソード的に始まっているのである。

次に44ページの例を見てみよう。

(8) （歴史のDEAを取ろうとしているPierre-Etienneが、コースにはいるのが難しいと話したのに対して）

J'ajoutai, et je devenais sérieux, qu'il serait marrant que je fisse partie du jury. On crut que je plaisantais. Je laissais dire mais, si d'aventure T. me demandait de le seconder pour les entretiens de sélection, je n'eusse pas aimé

être le candidat Pierre-Etienne. Après le dîner, nous *avons fait* une partie de Monopoly. Je servais les whiskies. Nous nous passions les dés, construisions des maisons, bâtissions des hôtels. (SB., p.44)

この複合過去の部分を単純過去で書くのは難しい。なぜなら、その後で、モノポリをしている間の様子が書かれているからである。単純過去で書けば、基本的にはモノポリを終えた次の段階の出来事に移らなければいけないからである。（ただし、これはあくまでも原則であるが。）動詞がcommencerであれば大過去にできるが、そうではないので大過去も使えない。また、ここで初めてモノポリのことに触れているので、半過去も使えない。となると、消去法的には複合過去しか残らない。文頭にAprès le dînerという時間の経過を表わす副詞句があって、その前の部分との間に切れ目があることが示されている。その前の部分で一連の語りが一旦終了し、新たな語りが始まることをこの複合過去は示していると考えられる。

次に複合過去が現われるのは、68ページである。

(9) （突然、一人でヴェニスに行った主人公にエドモンソンが電話の度にどうして戻ってこないのかと尋ねることが述べられた後で）
Edmondsson *a fini* par venir me chercher.
J'allai l'accueillir à la gare. .... (SB., p.68)

思いだしてみると、冒頭でもEdmondsson *a fini* par avertir mes parents.というように、finir parが複合過去で書かれていた。これは偶然の一致かも知れないが、「とうとう～した」という意味が、ある限界に達したという典型的な完了を表わしている点は重要である。完了的な事態は大過去で表わすこともできるが、その場合は単に単純過去基調で書かれている語りの中の一つの事態、もしくはその結果状態を表わすだけである。真の意味での完了と、テキストの中における転回点を表わすために、ここで複合過去が用いられていると考えられる。

finir parと意味的には対照的になるが、やはり限界に達するという意味で優れて完了的なcommencerもテキスト中に２回、複合過去で用いられている。一つは既に見た冒頭の部分であり、もう一つは結末に近い120ページに現われる。主人公はヴェニスから戻って再び浴室にこもる。

(10) Le lendemain, je ne quittai pas l'appartement.
Lorsque *j'ai commencé* à passer mes après-midi dans la salle de bain, il n'y avait pas d'ostentation dans mon attitude. (SB., p.121)

これも「ある事態の開始」という完了的事態をあらわすことと、テキストの中の転回点を表わしていると考えられる。

最後に残った例は、第３部の冒頭にある以下のようなものである。

(11) Edmondsson (mon amour) rentra à Paris.

Le matin de son départ, je l'accompagnai à la gare ; je portais sa valise. Sur le quai, devant la porte ouverte du compartiment, je voulus la serrer dans mes bras ; elle me repoussa avec douceur. Les portes furent claquées une par une. Et le train *est parti* comme un vêtement qui déchire. (SB., p.95)

ヴェニスまで主人公を迎えにきたエドモンソンに、ある日主人公はダーツの矢を投げつけて怪我をさせる。その後、エドモンソンがパリに帰る場面である。この部分を単純過去で書くと、単に列車が出たということを客観的に書くだけになるが、複合過去を用いることで語り手＝主人公の現在からの記述になり、いわば主観的な記述になる。この時点で二人の関係は気まずいものになっているが、最初の文のEdmondsson (mon amour)という書き方や、列車の前で彼女を抱こうとして押し返されるという描写からも分かるように、主人公のエドモンソンに対する気持ちは変わっていない。従って、エドモンソンに帰って欲しくないという気持ちは、複合過去を用いることによってしか表わせないのである。まさに「服が引き裂かれるように、列車が出て行った」のである。

以上で、この小説に出てきた総ての複合過去を検討した。基本的には複合過去は語り手の現在を基盤として過去の事態を述べるものであり、その意味で常に主観的なニュアンスを持っている。従って、冒頭が複合過去で始まる場合、それは語りではなく回想である。

＜＋意志性＞という特徴を持った動詞が複合過去で現われ易いのも、語り手の現在と結び付いた主観性という点から理解できる。

一方、限界達成を表わす典型的な完了（パーフェクト）を表わす述語が複合過去で現われていた点については、やはり主観性との関係で理解できるのではないだろうか。「ついに、とうとう、やっと」といった、モダリティー的性格の強い副詞をともなって訳すことが出来る点に注目したい。

２．単純過去の包括性

次に、単純過去の持つ問題点について少し考察してみたい。単純過去はアオリスト的な時制と考えられている。つまり、単純過去によって述べられた事態は全体として包括的に捉えられ、分割出来ないとされる。それゆえ、単純過去は継起的な事態を順に述べて行くとされる。しかし、必ずしもそうではない場合もある。先行研究でも既にそのことについては指摘があるが、ここではそれには敢えて触れず、ここで対象としている『浴室』に現われる実例を検討してみる。

先ず、(11)の例をもう一度見てもらいたい。最初の文がEdmondsson rentra à Paris. と単純過去で書かれている。次のパラグラフは、エドモンソンがパリに帰る列車に乗る場面であり、その最後の文で列車が出発する。従って、このパラグラフでは、rentrerという事態を構成する下位要素的事態が述べられている。この場合、rentrerはテキストのマクロ構造を表わし、その次のパラグラフは一つ下位の

構造を表わしていると分析すれば、基本的には単純過去が継起的出来事を表わすという点は問題にはならないという考え方もできる。しかし、より重要なのは単純過去の性格付けを救うことではなく、どうしてそのような性格付けが一般になされるのかということと、(11)のような例が単純過去の役割に矛盾するものではないということを示すことである。

単純過去が基本的に継起的な事態を表わすのは、単純過去がアオリストとして事態を包括的に捉えるからであり、この点は問題がない。しかし、一旦、包括的に捉えられ、そのようなものとして呈示された事態の中に、あらためて視点を持って行くことは可能である。このような例は、探してみると以外に見つかるものである。

(12) *Je fis le tour de la chambre*. Le lit était couvert d'un édredon brun-rouille. Un lavabo saillait du mur, sous lequel se trouvait un bidet en plastique. Une table ronde et trois chaises étaient bizarrement disposées au centre de la pièce. La fenêtre était grande, il y avait un balcon. Sans retirer mon manteau, je fis couler de l'eau dans le labavo, libérai un minuscule savon de son emballage et me lavai les mains. (SB., p.50)

(13) De retour à l'hôtel, *je me perdis dans les étages*. Je suivais des couloirs, montais des escaliers. L'hôtel était désert ; c'était un labyrinthe, nulle indication ne se trouvait nulle part. Au détour d'un palier tapissé de liège, agrémenté de plantes vertes, je finis par retrouver le couloir qui menait à ma chambre. (SB., p.52)

(12)の例では、最初に「部屋をざっと見てみた」とあり、以下、具体的に部屋の細部の描写や部屋を見ながらしたことが書かれているのである。ここでも、最初の文は包括的な事態を述べ、次にその下位事態を述べて行くという形が取られている。しかし、単純過去の継起性に対する反例として問題にされるのは、単純過去で書かれた事態の下位事態がやはり単純過去で書かれているというタイプのものである。従って、この部分の描写は半過去で行なわれているので、単純過去が表わしている事態の背景描写をしているに過ぎないという反論が出るかも知れない。しかし、たとえばMarie-Dominique entra. Bernard la suivait. (Imbs, p.91) のような、単純過去が表わす事態に対して同時的、付随的な事態を表わす半過去と違って、この例ではfaire le tour de la chambre「部屋の様子を見て回る」という行為の中で確認できる事が半過去で書かれており、＜包括的に事態を表わす単純過去→下位事態＞という図式で考えるべきである。ヴァインリッヒ流に言えば、Je fis le tour de la chambre. Sans retirer mon manteau, je fis couler de l'eau dans le labavo, libérai un minuscule savon de son emballage et me lavai les mains. と単純過去の部分だけをつなげば確かに物語の進行は分かるが、残された半過去の部分は背景であって二次的であるというのは間違っている。この部分ではホテルの様子は主人公の心理状

態とも呼応し合って、「手を洗う」のと同じぐらいに物語の雰囲気を構成する重要な要素である。

(13)でも、先ず「ホテルに戻ってきて迷ってしまった」と述べた後で、迷った時のことが細かく述べられている。その部分があって初めて、やっとのことで部屋に帰り着いたという感じが出るのである。ここも下位事態は半過去で書かれている。

先に引いた(11)の例はさらに複雑で、単純過去の後、半過去、単純過去、複合過去によって下位事態が述べられている。

３．まとめに代えて

この小論では、（書き言葉の）語りに用いられる複合過去と単純過去について、その問題点の指摘と具体例の分析を行なった。春木(2000)でも指摘したように、時制の用法の理解のためには実際のテキストの中での相互関係を考えない限り、皮相な理解に終わってしまう。そして、テキストというのはVuillaume(1985)などでも指摘されているように、重層的な構造をなしているのが普通である。そして、時制もその構造の重層性を反映したものとして分析しなければいけないのである。

（D. 1981、大阪大学教授）

［参照文献］

春木仁孝（2000）：「現代フランス語の大過去とテンス・アスペクト」『言語文化研究』第26号（大阪大学言語文化部）pp.179-197.

IMBS, P (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne.* Paris : Klincksieck.

VUILLAUME, M. (1990) : *Grammaire temporelle des récits*. Paris : Minuit.

［分析資料］

Jean-Philippe TOUSSAINT (1985) : *La Salle de bain.* Paris : Minuit.